

ExtraNews

カンボジア 「アジアの子どもたちに学校を贈ろう！」群馬県藤岡市「みかぼみらい館」に事務局を置く「子どもフェスティバル(0274-22-5511)」では市内の小・中・高等学校でブルタブやアルミ缶、ペットボトルキャップ、牛乳パック、書き損じハガキなどを集め換金し、学校を必要としているアジアの子どもたちに贈り学校建設に役立てる運動をしている。企画と事業の仲介は T・M 良薬センター。建設地案はカンボジア国、カンダール州、ピニャル村(首都プノンペンの北約 25 km)17 世紀の日本人町遺跡がある地だ。小学生 2 クラスと中学生 1 クラスの校舎で、集める費用は日本円で約 300 万円。2007 年 1 月より現地調査・下交渉・建設地選定が始まり、同年秋から着工、2008 年春に完成・開校となる計画。学校は州に寄贈され、州立の学校として、州が先生を派遣し運営される。愛称を「フジオカ・フレンドシップ・スクール」(仮称)として、藤岡市が後援会を作り、長期的に交流・支援する。図書室の整備や、保健室の増設、先生・生徒の交流・ワークキャンプ等、お互いの地域住民が参加できることで、建設後も様々な形で三世代の国際交流が見込まれる。本事業の実施組織は、NGO「SVA(シャンティーボランティア会)」すでにカンボジア国内に 140 棟以上の校舎を建設している実績のある団体で、心強い現地のカウンターパートナーとなる。

現在実行委員会では同市国際交流協会を始め諸団体、諸企業に協力を求め、さらに市の広報で市民に呼びかけ、広く募金活動を展開している。

- ・ 常時ご寄付を集めています。
- ・ 事業のスポンサーになって下さい。
- ・ 国際協力に興味のある方、ご連絡お待ちしております。
- ・ 様々な国際貢献を提案します。ご相談下さい。

群馬銀行本店 普通預金口座 2134150
郵便局 00160-5-591781

特定非営利活動法人 T・M 良薬センター事務局



T・M 良薬センター

〒371-0852
群馬県前橋市総社町総社1024
(Tel&Fax) 027-254-2325
(E-mail) office@tmrc.jp
(HP) www.tmrc.jp

表紙写真 / ミャンマー・マンダレー整体教室の生徒と記念撮影

ロンボークラブ 10



T・M 良薬センター ニュースレター

ミャンマー / スリランカ / ベトナム / ネパール /



ニュースレター第10号

平成18年9月23日

T・M 良薬センター事務局

Tel・Fax : 027-254-2325

E-mail : office@tmrc.jp

http://www.tmrc.jp

ミャンマープロジェクト

整体事業

全体の技術指導による職業訓練事業のため2005年6月からマンダレーとヤンゴンに駐在していた小川光星会員（58歳・整体師）が一年間の駐在期間を終え06年6月、無事帰国した。本年1月から始まった盲学校での職業訓練も成果をあげ、帰国時期がきても社会福祉省からVISA付きの滞在延長を依頼されるほどであった。1年の滞在で小川氏はスッキリと細くなり、健康状態も良好とのこと。黒く日焼けした顔がさわやかだ。



マンダレー整体教室

試験的に実施された今回の派遣に関しては TMRC ミャンマー事務所（アウンウィンタン所長）から社会福祉省に報告し、今までの実績と活動計画が提出された。今後本事業が同省に正式に認可されると MOU (Memorandum Of Understanding) 締結となる。ミャンマーの国で外国の団体が大規模な活動をする場合、いずれかの省庁と MOU を締結することが必須条件となる。国際協力機構（JICA）などの推薦事業であってもミャンマーの場合 MOU が先決となる。益々国際社会から孤立の一途を突っ走る同国では、軍事政権に拘束される可能性があるからだ。

現在申請中の MOU が結ばれば、小川氏は“プロジェクトマネージャー”となり、定期的にマンダレーの整体教室やヤンゴンの盲学校を訪れ、講師陣の技術向上と事業の進捗管理を行う予定だ。現在同氏は群馬県伊勢崎市妙見寺（小川志道住職）で地域住民に施術を行っているが、こちらも評判を呼び日々利用者が増えているとのこと。一方 MOU の方はアウンウィンタン所長が折衝中だが、手間取っている模様。最近現地から届いたメールでは・・・

お世話になっております。

MOUはなかなか難しくまだ回答できないことは申し訳ないのですが、最近外国のNGOが政治に関わる事件が発生しており、MOU締結後に何か起こった時の責任を恐れ、どの省庁も消極的になっているようです。そこで保証書を提出してあります。内容はTMRCに関連する収益などの金銭は一切外国へ持ち出さない、TMRCは政治に関わる活動をしな、政府関係者との関係などもさける、本事業と無関係の収益事業やそれにつながる仕事はしない、などが明記されています。

お変わりをまた通知します。

タン

9月11日小川光星氏にお会いしてミャンマー駐在中の話を取材した。昨年6月乾季、うだるような暑さが少しずつ和らいできたマンダレーを訪れ、身辺整理も一段落すると、タン所長が理事長を務める日緬語学学校に、新たに午後のクラスとして整体教室が開講された。当初本校の学生120人が受講していたが、すぐに60人に減った。学費無料の本校では午前中に日本語と英語のクラスがあり、それが終わったあと学生が興味半分で整体教室に顔をだす程度であった。「ミャンマーには整体を知る人は皆無でした。どういうものなのか、どんな効果があるのか。まったく無の状態から始めたのです。」小川氏は開講と同じくして、午前中に小さめの教室を借りて、整体の診療所を開いていた。7月末、9歳の女の子が担ぎ込まれた。生まれつき下半身麻痺で、両手で這って生活してきたという。2度目の施術で、自力で歩けるようになった。たまたま同診療所を利用していた元マンダレー教育長がその経過を見ていて、その子をすぐに地元小学校に入学させた。3度目に診療所を訪れた時は、真新しい制服を着て、満面の笑みで母と歩いてきたという。「その頃から生徒が急増し、学校外からも多くの方が受講に訪れました。」噂は一気に広まったのである。



下半身麻痺が回復し、入学した又エ又エウちゃん（9歳）

1クラス20人を1日4クラス、ぴったりベッド10台が収まった教室に、トッチョ校長の通訳で整体の指導が続けられた。「指導する時間が限られていたので、日本語が上手だったり、才能が光る生徒を5人、次期指導者として教え込みました。」同氏は1年の駐在期間中に、本事業が現地の人々の手で継続されるよう土台作りをする必要があった。12月には学期終了式が行われ、65名の卒業生がその成績によって各資格を授与された。「証」はまだ研鑽する必要があるというもの、「講師」は施術できるレベルのもの、「教師」は施術できる上に、その技術を人に教えられるレベルのもの。「受講生の内には外科医や、生物学者、弁護士、各地の大学からも多くの教授が習いにきていました。本当にいろいろな人が来ていて、楽しかった。教室では生徒を覚えるために顔写真を撮りました。」沢山の名前入り写真を紹介しながら同氏は笑う。

診療所も評判が評判を呼び、日々大忙し。「1年間で6000人以上の患者を診ました。半身不随の患者も沢山きましたが、みな普通の生活

ができるまで改善しました。」一番ひどかった上等兵の患者は訓練中に転落してほとんど全身麻痺に近かったが、3度目の施術後には自分でトイレにいけるようになったという。「托鉢の途中で両足が動かなくなった僧のため寺院に出張したこともありまして。なんとか杖をついて歩けるようになり、3日後来院した時は杖を忘れて帰っていきましました(笑)」

雨季に入り草花が美しく咲き乱れる頃、マンダレーで要職に就いていた当時の総理大臣の義妹が狭心症で来院していた。その完治の知らせが政府に広がると小川氏は10月、正式にヤンゴンの国立盲学校に招待される。マンダレーの整体教室を、次期指導者に任せ、2006年1月から日本語の上手な「教師」ゾウゾウアウン氏とヤンゴンに拠点を移す。左官クラスが使用する官舎から毎日「チミンダイ盲学校」へ通い、政府が人選した40人の障害者を指導した。全国から集められた社会福祉施設利用者の半分は盲人だったため、「体のどの部分を押さえて、どうひねるか、一人一人、私の手や体を触らせて確認させる必要」があり、20人全員が理解するまでそのままの格好を維持するのが大変だったという。「盲や聾啞の人は感が鋭く、呑み込みが早い」と同氏が称賛する通り、3月の第一期ヤンゴン整体教室卒業式には障害者の整体師が40人生まれた。この間に整体の資格がマンマー政府に公認され、「講師(Level 2)」と「教師(Level 1)」が同国の国家資格となった。マンダレーと同様に次期指導者が5人選出され、日々習得に励んだ。3~6月もさらに47人の障害者が整体の職業訓練を受けた。

同氏が6月末に帰国するまで、マンダレー整体教室で104人、ヤンゴン「チミンダイ盲学校」で87人、計191人が整体師となった。新たに開院する卒業生もいて、各地で住民の健康推進のため活躍しているという。6月10日の第二期卒業式に晴れて「講師」を取得したタウンリンさん(盲人)は、「収入が1日2000チャットだったが、今では5000チャットに増えた。今月は25万チャットも得られた。大変ありがたい。」と、先生に喜びの報告をした。

両整体教室では現在も新たな指導者によって職業訓練が続けられている。「我々はサポートしてあげることしかできない。現地の人によって運営されることに意義があるのです。」「暑さや停電には慣れます。1年間困ったことは何もなかった。行きずりの人が心からの善意で手助けしてくれる。また行きたいです。」小川氏は語る。



小川光星氏

放置自転車リサイクル事業

日本の自治体で保管してある放置自転車をアジアの学校に通学用として寄贈する活動で、2005年12月、神奈川県川崎市役所から400台の無料払い下げを受け、多くの協力者参加のもとミャンマーへ発送したものが2006年3月、400台のうち修理せずですぐ使用できる280台が、ミャンマー僧ウカリヤーナ氏から4ヶ所の小学校へ教員と学生の通学用として寄贈された。

寄贈を受けた学校は第13小学校(ウテンテイ校長)と第19エスタン小学校(ドーキンマテン校長)とともにタウチャン町。第3ベチィ小学校(ウチョーエイ校長・ミンガラドン町)、ピドゥ僧学院(ウササナ校長・カイン県ミャワディ町)の4校。

日本から発送した際、貿易会社(株)エムティエムジャパンと日蓮宗神奈川一部社会教化事業教会などの協力のもと全車解体作業を行い、部品をばらして荷積みをしたが、バンクしていたり、施錠したままのもの、劣化が進んだ自転車も数おおかった。ミャンマーまでの輸送費を削減するため横浜からタイまで船で運び、そこからトラックで国境を越えた。日本から船を見送ったウカリヤーナ氏はタイに先回りし、積み荷したトラックに乗り込み一緒に帰国した。1ヵ月半の旅を終え現地に届いた自転車は再度組み立てられたが、何台かは部品が欠如するなど運転できる状態ではなかったため、先に使えるものから寄贈することになった。

2006年9月12日、現地から届いた感謝状と写真を持って川崎市役所に報告した。担当者は、また協力したいと大変喜び、次回の活動が約束された。神奈川一部社教会も「次はいつ実施するのか」と積極的。

アジア諸国では自転車を持っていない学生が沢山いる。学校で遠方の学生にレンタルできれば通学自体に難渋している子供達が大変助かるとい

地方の学校に届けられる様子



ウカリヤーナ氏と教員

るという。自転車が買えず、徒歩で郵便配達をしている地域もある。日本の放置自転車撤去数は都内だけでも18万台に及び、そのほとんどは全国の保管所に眠ったままだ。処分される前にリサイクルしたいものだ。継続的な運動になるように、今後も輸送費を募って他の国々でも受け入れ先を募集したい。

スリランカプロジェクト

落慶式ツアー

本事業では 2004 年 12 月のスマトラ沖大地震の大津波で、壊滅的打撃を受けたスリランカの救援のため、2005 年 3 月に同国文化省大臣と会見し、同国仏教会と連携しながら復興計画を実施している。

このたび、現地の要請により各村の象徴であった仏教寺院 3 ヲ所が再建され、日本のスポンサーと落慶式ツアーが実施された。2006 年 8 月 26 日から 9 月 2 日まで、スリランカ仏教会の長老・ダンミッサラ僧正の案内で同国仏教会との交流を主とした訪問となった。

訪問団は団長旭英順日蓮宗社会教化事業協会連合会会長、団員に深澤尊明氏、近澤雅昭氏、近澤房代氏、三浦鍊浄氏、森山哲夫氏、森山智恵子氏、吉田京子氏、当会からは小野理事長、藤井淳至会員、石原幹誓会員の計 11 名。ネゴンボに到着した一行は世界遺産「仏歯寺」を参拝し 28 日、専用バスで被災地へ行く途中に中央山岳地バンダラウェラへ向かう。ダンミッサラ氏が進める教育振興事業で、群馬県天龍寺がスポンサーとなり建設していた僧学院が完成していたため落慶式を行った。この地区の子供達は通学できなかったが、このたびの支援により短大卒業まで学べる学校を手に入れることができた。(写真右)



教室が完成し喜ぶ児童

被災した沿岸部に移り 29 日、壊滅状態となったハンバントタ市ミリジャピッラ・スワルナプラ村を訪問。仏教国スリランカの町村には必ず菩提樹を囲んだ仏堂があり、そこを中心にして民衆が生活している。全てを失った同村住民の叫びに茨城県本成寺が応え 60 万円を出資、仏堂を再建し、このたび落成を迎えた。式典では流された菩提樹に変わり、新たな菩提樹の苗が植樹された(写真下)。集まった村人は仏堂を囲み歓喜の涙を流し、村の復興と再出発を誓った。



30 日午前、新たにスポンサーとなった新潟県東部社会教化事業教会が支援するコッテゴタ市パンタラーマヤ寺を参拝し、津波で流された後更地となった仏堂の跡地で起工式を執り行い、団員は建設予定地の隅にレンガを埋め、無事竣工することを切に願った。同会では完成予定の 11 月に落慶式ツアーを実施する計画だ。

続いて静岡県中部宗務所がスポンサーとなって 70 万円を出資し、再建を果たしたマータラ市スマナラーマヤ寺で落慶式が行われた。同寺は津波で全壊したが、奇跡的に菩提樹は生き残った。被災者は大空にまっすぐ伸びるこの樹を見て、希望を取り戻したという。マータラの人々の強い希望に応えこの度、静岡市の有志寺院により、その菩提樹を囲むように見事に再建されたのである。瑠璃色と白のコントラストが美しい。(写真右)



午後には海岸の町、ウェリガマ市の要望を受け、静岡市の仏教会が 81 万 5 千円の支援をして、今回完成したスバドララーマヤ寺を参拝し、潮風で仏教旗がはためくなか落慶式が執り行われた。椰子の木が並ぶ白砂の上によみがえった寺院には、被災者を供養する村人で長い列ができ、献花は鮮やかに映えた。

静岡中部から参加した旭団長は、「同志の気持ちが集まって寺院が再建され、多くの人々に希望の光を与えられた」と、胸を打たれた。



スバドララーマヤ寺
(ウェリガマ市)
落慶式に参拝し献花をする大勢の人々

沿岸部を歴訪した訪問団とスリランカ仏教会の代表は 9 月 1 日、首都コロomboへ到着。

一行は同国文化省大臣と会見した。大臣は前回の復興支援に関する会議から、このたびの迅速な支援活動に深甚なる謝意と敬意を表し、旭団長は今後も継続的な復興に協力することを伝えた。市内レストランで精進料理の会食を開き、最後は団員一人一人と握手が交わされた。

翌日全員無事に帰国し、1 週間に及ぶスタディーツアーが終了した。自らの意思で困難に直面している多くの人々を救援できることを実感した活動となった。海岸の穏やかな日常を、恐怖の底に陥れた悲劇は未だあちこちで民衆の“心の拠り所”を奪ったままだ。さらなる復興を願うばかりである。

ベトナムプロジェクト

VJILC 視察

清水海隆理事ら視察団は 2006 年 8 月 21 日～ 25 日の日程で、当会が理事会を担当している「ベトナム日本 IT 語学センター（ゲンフォン校長）」のハノイ校とハイフォン校などを訪問し、運営状況を視察した。当センターはハノイ教育訓練局認定校であり、日本の理事会（小野文瑠理事長）からの援助による低価格な学費と学割制度が最大の特徴である。常時ベトナム・日本人、両者による指導を行っており、図書 of 無料貸し出しサービスもある。最近全教室にクーラーが完備され、生徒からは「勉強に集中できる」と好評である。各種手続きや問い合わせはオンライン化され、朝 10 時から 20 時まで常駐スタッフがリアルタイムで対応している。「聞く・読む・書く・話す」の 4 技能を両国のスタッフにより総合的に学習でき、会話クラス・試験対策クラスのような専門分野強化クラスも開講している。

コース

初級クラス	週3回、1回 1時間45分、内2回はベトナム人教師による文法を中心とした授業、1回は日本人講師による会話を中心とした授業を行っている。
会話クラス	週1回、1回 1時間45分、全8回 日本人講師による会話に重点をおいたクラス。
日本語能力検定2級対策クラス	週3回、1回 1時間45分、ベトナム人・日本人講師による日本語検定2級合格を目指すクラス。

カリキュラム

初級クラス	主要テキスト：みんなの日本語初級 ひらがな、カタカナの読み書きを習得したのち3ヵ月間で基礎文法を学び、簡単な日常会話を日本語で表現できるようにする。延長も可 約8課(形容詞を使った表現)まで/3ヶ月間
会話クラス	主要テキスト：新日本語の中級 日本語能力検定3級合格者、3級レベル程度の日本語を理解できる人を対象としている。会話に重点を置き、今までに学習した基礎文法を更に発展させ、様々なパターンの表現ができるようにする。
日本語能力検定2級対策クラス	12月に行われる日本語能力検定2級合格を目標にした試験対策クラス。

授業料

社会人：250,000VND/月 学生：190,000VND/月
 会話クラスのみ 100,000VND/月
 支払いは一括払い(3ヵ月分)か、月払いの選択が可能。

センターの現状

クラス数：6クラス
 初級クラス：月・水・金 4クラス 18：15～20：00
 初級クラス：火・木・土 2クラス 18：15～20：00

在籍数：82名 社会人：30名 ・ 学生：52名

在籍教師：8名 ベトナム人5名(日本語能力試験2級合格者4名1級合格者1名)、日本人3名
 職員：4名 ベトナム人2名 日本人2名

日系企業が多数進出しているハイフォンに、姉妹校として開設されたVJILCハイフォン校では、2005年6月からトヨタ合成要請を受け、同社にて現地採用者に日本語とビジネスマナーを出張講習していたが、派遣講師の田中鉄雄氏が帰国してからは休校となっている。

視察団はハノイから専用バスで1時間、北東の港町ハイフォンを訪れた。当姉妹校はハノイ校に似た造りのキレイなビル。近くには野村ハイフォン工業団地がある。153ヘクタールの広大な土地に30社以上が海外拠点を出している。トヨタもこの内の1社。日本語研修の需要は高まっている。

センターでは今後さらに両国の講師を募集して、中級、上級クラスも開講し、日系企業ではビジネスマナーも強化していく予定だという。

「その他にも、料理講習会、日本人との交流会など、日本文化を肌で感じとれる催し物を定期的開催する予定です。

受講生の方々が今まで以上に“日本語を学びたい”と思う、その心を大切に育てていけるようなセンター作りに職員一同勤めてまいります。」

野村ハイフォン工業団地の遠景



ハイフォン校



ネパールプロジェクト

小民族を支援しましょう

インドの侵略王マヘンドラ・ビム・ビクラム・シャハは、強引にネパール政権を掌握し（権力者を一堂に集めてマシンガンで皆殺しにしたという）その強行な政治により国民のストレスは爆発し、各地で国軍と衝突している。経済は落ち込み貧富の格差は広がる。もともとカースト制が根強よく残っているなか、就職や結婚など日常生活の様々な場面で生じる「低カースト差別」に拍車がかかっている。

「お釈迦様はおれ達のおじいさんだ。」首都カトマンズのすぐ南、古都パタンの町にはシャカ族が多く居住している。弾圧に追われてこの地に定着し仏像などを作っている。日本に3年間留学し情報処理を学んで帰国したラジバイ・シャカさんも「我々は会社に入れない」と、やはり家業を継いでいる。カーストの壁を乗り越えるのは想像以上に困難なようだ。

悪政はインドのヒンドゥー語を強要し、今では一つ屋根の下で祖母とコミュニケーションがとれない子どもが急増している。元来ネパールの言語であるネワール語などは仏教典や寺院などでも使用されている。シャカ族はその血縁を誇りに思い、伝統文字を大切にしてきた。「リピタプグティ（文字学塾）」は自国と子ども達の未来のために有志で開いたネパール言語を教える私塾である。講師陣はシャカ族を中心に皆ボランティアで教えている。

当会では弾圧を受ける小民族を支援するために、ネパールに代々伝わる手作り人形やお守りなどを、町のお母さんたちに作っていただいて、日本で販売しています。ご協力下さい！ 下の人形は送料込みで1つ300円。



テムちゃん人形
(約3 cm) 全10色

インドの侵略王マヘンドラ・ビム・ビクラム・シャハは、強引に



ダルマチャクラ・ストラップ(約10 cm)
1つ300円



バズラ・ストラップ
(約4 cm) 1つ300円



ラジバイ・シャカ作
バズラ 首飾り
(約2,5 cm) 700円



キーホルダー (約3 cm)
1つ300円

みな仏教のシンボルをモチーフにしたものです。この他にも色々なものがあります。売り上げは全て「伝統文字学塾」の支援や、小民族の生活費になります。シャカ族の人々が1つ1つ心を込めて作っていますので、注文してから少し時間がかかります。手軽に参加できる国際協力です。是非ご協力下さい。お問い合わせはTMRC事務局まで。

2006年春には日本のご寄付によりネパール伝統文字のフォントが完成しました。「学塾の教科書や新聞発行などに大変役立っている」と、感謝状が届きました。今後とも人権擁護、文化保存のためご協力を重ねてお願い申し上げます。